

中国語の疑問文における疑問と 否定の相通性及び肯定と否定の対立

王 少鋒* 金 昌吉**

The relativity of the categories of question and negation and the asymmetry
between affirmation and negation in the interrogative sentences

Shaofeng WANG* Changji JIN**

Two issues are mainly discussed in this paper: 1, the relativity of the categories of question and negation. 2, the asymmetry between affirmation and negation in WH questions. Firstly, it indicates that there are two kinds of “疑” in Chinese interrogative sentences. One is “question”, which connects to the polar opposition of known-unknown in cognitive field, having nothing to do with affirmation and negation. Another one is “doubt”, which concerns with psychological activity or subjective attitude, and directly relates to the polar opposition of believe-doubt, where “believe” is inclined to affirmation, and “doubt” corresponds to the negation. In other words, it is the consistency of two polar oppositions that establish the semantic relativity between question and negation directly. Secondly, in WH questions, the use of “都/也” is asymmetric. It is noted that this problem can be explained through the core meaning of “都” and “也”, and the polar opposition of affirmation-negation. “都” means “all” (sum up), and “也” means “also” (same). If we take WH pronouns as a wildcard, then the use of “都” means summing up all the wildcard in one-time, therefore both of affirmative and negative sentences become same. But the function of “也” in the affirmative sentence is to accumulate two similar elements, when the set having only two elements can be combined into the total, and if there are a number of elements in a set, the wildcard are only combined to the previous element, and they can't sum up the total. In the negative sentences, “也” plays a role of reduction of similar elements, and all the wildcards can be reduced one by one until the result will be 0. It means “也” can extend to the limit of the negative polarity—the negation of all elements (the whole set).

Keywords : question affirmation negation relativity polarity

キーワード : 疑問 肯定 否定 相通性 極性

* 大阪電気通信大学人間科学研究センター准教授

** 大阪電気通信大学非常勤講師

1. はじめに

言語は、語彙が一定の規則性（広い意味での文法）によって構成された複雑な符号体系であり、さまざまなカテゴリーの集合である。その符号化体系においては、疑問と否定は、非常に重要な語彙、文法のカテゴリーである。疑問と否定との間にどのような対応関係があるのか、これは非常に重要な課題であり、我々が本稿において研究、議論すべき課題である。

疑問と否定との間に関連性があることは疑う余地もなく、中日両国の学者によって多くの検証が行われてきた。中国語の疑問文の文末に使われる疑問語気助詞「吗」の起源は、否定詞の「不（無）」であると指摘されている。（太田辰夫1958,p.360, 吕叔湘1982,p.287）。吕叔湘が1985年に疑問、肯定と否定と一緒に議論し、沈家煊が“疑问跟否定是相通的”（疑問と否定とは相通性がある）（1999,p.45）と明言した。現在この認識は多くの学者に賛同され、その後も多くの学者がこの問題について検証している（例えば张晓涛2011、金昌吉2016など）。

本稿では、主に以下の二つの問題について論じていきたい。

1. 疑問文（wh疑問詞疑問文を議論の対象とするが、その他のタイプの疑問文も触れる）中の疑問と否定の相通性について。
2. 「wh+都「全て」/也「も」…」文の肯定と否定との対立について。

2. 疑問文の中の疑問と否定の相通性

疑問文は、聞き手に情報を求める文である。（言語情報のフィードバックを求める。张斌1998p.115）。話し手は、あること（命題）の関連情報がないので、聞き手に尋ねる。例えば：

(1) 小王来了吗？「王さんは来ましたか。」

各種の疑問文は、肯定と否定との二つのタイプに分類できる。例えば：

(2) a. 他来吗？「彼は来ますか。」

b. 他不来吗？「彼は来ませんか。」（諾否疑問文）

(3) a. 谁来了？「誰が来ましたか。」

b. 谁没来？「誰が来ませんでしたか。」（Wh疑問詞疑問文）

反復疑問文と選択疑問文のいずれも二つの諾否疑問文が合併して成立したものである（朱德熙1982,p.p.202-203）。ただ、反復疑問文自体が肯定と否定を合わせて構成されている。例えば：

(5) 你去不去？「あなたは行きますか、行きませんか。」

選択疑問文は、話し手の心の中ではいくつかの選択肢が（普通は二つ、複数も可能）あるが、まだ確定していないので、聞き手に提起して選択させる。厳密にいうとまったく知らないわけではなく、相手に関連情報を確認するので、否定の形ではあまり使用されない。例えば：

(6) a. 你去还是他去？「あなたが行くか、それとも彼が行くか。」

b. 你不去还是他不去？「君が行かないか、それとも彼が行かないのか。」（滅多に使わない）

典型的な諾否疑問文は、命題の真偽だけを検証する文といえるだろう。単に論理的命題にとって命題は、真（T）か偽（F）かの二つの値しかなく、真でもなく偽でもない第三の値は存在しない。下の表を参照のこと。

P	~P
T	F
F	T

(6) a. 张三杀了李四吗? 「張さんは李さんを殺したか。」

——没有, 张三没有杀了李四。 「いいえ、張さんは、李さんを殺さなかった。」

b. 张三没有杀李四吗? 「張さんは、李さんを殺さなかったか。」

——不, 张三杀了李四。 「いいえ、張さんは李さんを殺した。」

例(6)のaとbから明らかなように、肯定と否定は命題と表裏の関係にあるが、命題の真偽値とは関係ない。表と裏の命題からそれぞれ二つの値があり得る。真か或いは偽か。否定は肯定命題の反対側だけである。

否定は肯定と対立的な概念であり、肯定は否定が存在する基礎である。否定は文法否定(文否定)もあり、具体的に、語彙否定(例えば、“无知、非法、否定”など)もある。我々がここで議論するのは主に文法否定(文否定)である。

肯定文は、聞き手にとって全く新しい情報を用いることができるが、否定文はそれができない。相手のエラーメッセージを訂正する時に、否定されたことが聞き手にとっては全く知らないこと、或いは突然言及されたことならば、それはいささか不思議であろう。Givón (1978,p.109)は、かつて「否定はそれに相当する肯定の内容が既に議論されたか、或いは、それに相当する肯定の内容を聴者が信じている—従ってよく知っている—と話者が思っているような文脈で用いられる」といっている。¹⁾

だから、「否定文が会話の中で全く新しい情報を紹介するのに用いられない例として、例えば、友人に会って、What's happening?と聞かれOh, my wife's pregnantと答えるのは少しも不思議ではない。しかし、Oh, my wife's not pregnantといえ、恐らく相手はWait a minute—was she supposed to be pregnant?とかHold it—I didn't know she was supposed to be pregnantなどというであろうとGivón 1978はいう。My wife's not pregnantが適切に用いられるのは、My wife's pregnantが話題になっているか想定されているかの場面であって、のっけからこれ全体が新情報として与えられるのは適切でないということである。」²⁾

以上のように、否定と肯定の使用は非対称である。肯定は無標であり、否定は有標である。否定の使用は肯定と比べてより多くの制限を受けている。

Wh疑問詞疑問文はwhyを除いて大抵は肯定の形式を求めるので、「誰が張さんを殺したか」は問題がないが、「誰が張さんを殺さなかったか」は少し奇妙だ。

語用の面からみると、否定は命題と正反対であるだけでなく、否定は他者の依頼や要求を拒絶することもでき、不適切な表現を修正したり、異なる意見を表明したり、ある表現を否定拒否したりするためにも使用できる。

(7) 对不起, 我现在没有时间。「申し訳ありませんが、今は時間がありません。」(婉曲に断る)

(8) 这天气不是暖和, 是炎热。「この天気は暖かいのではなく、暑いです。」

(9) 我不是辩解, 我只是在陈述事实。「私は弁解しているのではなく、事実を述べているだけである。」

(10) 我不是在上海住了几年, 而是一直住在上海。「私は上海に何年か住んでいるのではなく、ずっと上海に住んでいる。」(以上の三例は相手の誤りを正すため)

(11) 我儿子贪污了公司的钱？可我压根就没有儿子！「息子が会社のお金を横領した？でも、私にはそもそも息子がいない！」（前提の否定）

上記の分析から我々は、疑問と否定は同次元のカテゴリーではないことが容易に分かる。疑問は語気カテゴリーに属するが、肯定と否定は情態カテゴリーに属する。

すべての文に肯定と否定の二つの形が存在する。疑問文は肯定形でも否定形でもできるが、否定表現は平叙文にも存在し、疑問文にも存在する。では、この二つのカテゴリーの相通性はどこから来たのだろうか。

疑問文は疑問の語気を表すものである。中国の現代言語学という意味での最初の文法論の著『馬氏文通』(1898年)は、助詞の語気によって文を大きく二種類に分けている。一つは「伝信」(真実を伝達する)であり、もう一つは「伝疑」(疑問を伝える)である。そして、「伝疑」の部分はさらに次の三つ分けられる。「一则有疑而用以设问者」、「一则无疑而用以拟议者」、「一则不疑而用以咏叹者」。(一つは疑問があって設問するもの)、(一つは疑問がなく推測、議論に用いられるもの)、(一つは疑わないで詠嘆に用いられるもの)(马建忠 1983,p.323,p.361)。つまり、疑問文は一つの形式であって、その機能は様々である。

吕叔湘は『中国文法要略』において、疑問文の中の「疑い」と「問い」を分離し、「疑問語気は総称であり、「疑い」と「問い」の範囲は必ずしも一致しないという(“疑问语气是一个总名‘疑’和‘问’的范围不完全一致”)(吕叔湘 1982,p.281)。

「疑」があれば、問うのが自然な流れであるが、時には疑問文は関連情報を全く知らないわけではなく、知っているのが確かな情報ではないために、聞き手に確認する必要があるときに使用される。或いは、何らかの主観的な態度を表すために疑問文の形が使われる。例えば：

(12) 他已经回来了吧？「彼はもう帰ってきたでしょうか。」(何かのルートから関連情報を得ているが、確かかどうかを疑っている)

(13) 你肯定自己不会后悔？「あなたは後悔しないことが確かだろうか。」(相手の立場や覚悟を確かめる)

戴耀晶(2001,p.89)によると、「疑い」は一種の心理的な言語行動であり、必ずしも解答を求めているわけではない。「問い」は、一種の言語的なコミュニケーション行動で、話者は答えを求めている。この見解は非常に鋭い。

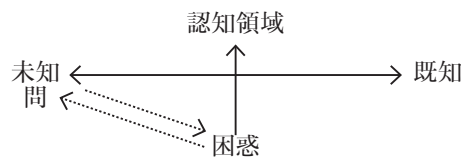
近年、一部の学者によって、「信」と「疑」の対立を疑問文の中に導入した疑問の程度についての研究が行われた。例えば、邵敬敏(1999,p.12)は「信」と「疑」は、互いに消長の要因であり、「信」が一つ増すと、「疑」は一つ減り、逆に、「疑」が一つ増すと、「信」が一つ減る(“信与疑,是两种互为消长的因素,信增一分,疑就减一分;反之,疑增一分,信就减一分。”)と指摘している。更に、邵敬敏は次のように論じている。「疑問の程度に決定的な役割を果たしているのは疑問文のタイプで、その次は疑問語気を表す語句である。反復疑問文は肯定と否定の二つの相を有しているため、可能と不可能が半分対半分になる。「疑」の程度は中間位である。つまり、「信」と「疑」が半々である。Wh疑問詞疑問文は、問い合わせ対象を全く知らないという状況であり、「疑」の程度が最も強い。すなわち「信」が0で、「疑」が1である。反語文は疑問文の形を使っているが、話し手は心の中で明確な考えを持っていて、答えは疑問文の中にあるのであり、疑問の要素は何もない。すなわち「信」が1で、「疑」が0である。“吗”疑問文については、「信」が1/4で、「疑」が3/4である。「吧」疑問文は、「信」が3/4で、「疑」が1/4である。(“对疑问程度起决定性作用的是疑问句类型,其次是疑问语气词。正反问由于提出肯定、否定

两项，因此可能与不可能各占一半，疑惑程度居中，即信、疑各为 $1/2$ ；特指问对所询问对象完全不知，疑惑程度最强，即信 0 而疑 1；反诘问虽然采用问句形式，但问话人心中已经有了明确的看法，答案就在问句之中，没有什么疑惑的因素，即信 1 疑 0。至于‘吗’字是非问句则为信 $1/4$ 而疑 $3/4$ ，‘吧’字是非问句为信 $3/4$ 而疑 $1/4$ 。”)

「信」と「疑」の対立を疑問文に導入した疑問程度に関する研究は、疑問と否定との関連性を浮かび上げ、疑問程度をより理解し易いものにした。沈家煊 (1999,p105) が疑問は否定に傾いていると指摘したことも、その問題をより理解し易くした。質問は「不確定」を表すものであるからだ。晓涛 (2011,p.139) はさらに、「疑問文は、疑問を表すものから突然に否定を表すものに変異したわけではなく、徐々に変化し、問いから疑いへ、更に否定へ発展した過程だ」(“疑問句由表疑问到表否定并不是突变的，而是一个渐变的过程，经历了从询问-怀疑-否定性的发展过程”) という。このように見てくると、疑問と否定の相通性については、ある程度の解釈を得ることができるが、問題の全体的な脈絡はまだはっきりしておらず、対応関係にはもっと簡潔な接点があるはずである。

我々の見解からすると、いわゆる否定には、実際に二種類の否定概念がある。一つは構文形式的な否定（否定情態詞を使用）で、もう一つは語用的な否定（主観的な態度で否定するので、必ずしも否定詞を使用する必要はない）である。疑問文は構文情態上の肯定・否定とは別の領域の相容関係（すべての疑問文は肯定形でも否定形でもできる）にあるために、疑問と否定との相通性は、語用論レベルで対応していると認識すべきであり、疑問の否定は主観的な態度の否定である。

「疑」も疑問文の中で二つに分けるべきである。一つは事実や知識の無知から生まれる「疑」であり、それに対応した極性は認知領域の「未知-既知」である。

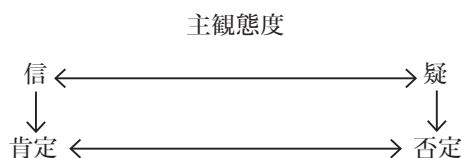


未知から「疑」になり、「疑」から問いたくなる。既知には困惑がなく、問う必要もない。この極性は肯定と否定とは関係ない。例えば：

- (14) a. 他是中国人吗？「彼は中国人ですか。」
- b. 他不是中国人吗？「他不是中国人不是吗？」

肯定も否定も「疑」の範囲になるが、否定表現は疑問文の中で一種の情態形式だけである。

もう一つは懷疑の「疑」で、一種の心理活動で、或いは一種の主観的な態度である。それに対応した極性は「疑-信」である。その極性は直接的に人間の主観的な態度と関連して、「信」は肯定に傾き、「疑」は否定に傾く。つまり、「信-疑」の極性と「肯定-否定」の極性とは平行していて、直接関連している。



例えば：

- (15) a.你去吗？「あなたは行くか。orあなたは行きますか。」
b.你会去吧？「あなたは行くのよね。」
c.你真的去吗？「あなたは本当に行くのか。」
- (16) a.你去不去？「あなたは行くか行かないか。」
b.你到底去不去？「あなたはいったい行くのか行かないのか。」
- (17) a.谁去？「誰が行くのか。」
b.到底谁去呢？「いったい誰が行くのか。」
c.谁去呀？！「誰が行くのか。」

以上の各文のaはすべて一般疑問文であり、bとcは、文にモダリティ表現があり（語気副詞や語気助詞を使う）、「信」の度合いが強ければ主観的な態度も肯定的に傾いていく。逆に、「疑」の度合いが強くなると、主観的な態度は否定的に傾く。一般的な疑問形式は認知領域においては未知の情報について聞いているだけで、肯定も否定も使える。しかし、語気を表す副詞（本当に、確かに、まさか）や文末語気助詞（でしょう）や反語表現などが入ると、主観的な態度に関連して、それによってある程度の否定効果が生じる。主観的な態度の否定は文面下の含意によって示されているので、文面の否定は、語用面では肯定になり、文面が肯定の場合は語用面では否定を意味する。しかも否定の度合いは語気副詞などの使用によって違う。

反語文は最も否定的な要素が強く、認知領域では「疑」の要素がないといえるかもしれない。しかし「疑」と「信」の極性から見ると、それは極度の疑い（懐疑的）を表現するセンテンスだと考えられる。語気を表す副詞や文末語気助詞などが使われる疑問文は、「信」と「疑」の間にある。例えば：

- (18) 他会去？！「彼は本当に行くの？！」
(17) c.谁不去呀？！「誰が行かない！」

例（18）は、「彼が行く」というメッセージの真実性が極端に疑われており、疑問文の形で表現されてはいるが、主観的には否定の認識に傾き、行くことを認めておらず、彼は行かないだろうと考えているといえる。例（17）c.も同じく、実際は皆が行くことを表している。金昌吉はwh疑問文の中の疑問と否定について次のように述べている。「哪里「どこ」の否定の意味としての使い方は、反問のニュアンスが前題（presupposition）を打ち消したことから始まり、本来の場所表現＋関連句類義（反問句＝文面と反対意味を表す）として使用される。具体的に、“哪里”「どこ」を用いて質問するときは、ある場所が存在することを前題として質問しているが、反語文ではこのような場所が存在するという前題が打ち消されており、その場所は存在しない。さらに代名詞の任指義を加えると、どこにもそんな場所は存在しないことになり、徹底的な否定になる」（金昌吉 2017, p.74）この解釈は我々の今の認識とは矛盾していない。なぜなら、極度の疑いは限りなく否定に近いからだ。疑問文で表現しているのは、主観的な態度だけで、あなたの言う未知のXなど根本的に存在しないと疑っていることを表わしている。まさにこの原因で、多くの反語文の後にもう一つ非疑問形式の否定あるいは肯定文がよく現れる。例えば：

- (19) 他会去？我才不相信呢！（彼は行く？私は信じません！）
(20) 谁去呀？你别做梦了！（誰が行くものか？夢を見るな！）
(21) 什么不知道？你一定知道！（何が知らない？君はきっと知っている！）

ここまで、疑問と否定との間に関連が発生する脈絡も明らかになり、両者に互いに通ずるルー

况的格式，是一条出路。」(日本語略訳：“Q+也…”を疑問代名詞が“也”の類同義の働きによって、極端な状況を表す構式になると認識すれば、一つの道である)と論じ(杉村 1992,p.168)、次のように述べている。「“如果‘也’字前的疑问代词不表‘任指’而表‘偏指’，即疑问代词代表由自己的指代对象构成的集合成员里‘最有可能P(肯)的那一个’，我们就可以比较圆满地解释现代汉语里存在‘Q十也十P(否)’结构，而不存在‘Q十也+P(肯)’结构的原因”。」(日本語略訳：もし“也”の前の疑問代名詞が“任指”ではなく、“偏指”を表すとすれば、つまり疑問代名詞が、自分の指す対象で構成されている集合(set)の中に、最もP(肯定)になる可能性が高い要素を指し示すなら、我々は、現代中国語において‘Q十也十P(否定)’の構造は存在するが、‘Q十也+P(肯)’の構造は存在しない理由を完璧に解釈できる)(杉村 1992,p.168)

しかし、問題は例外と思われる実例があると思われることである。そのためか、後に杉村博文は仕方なく次のように論を改めた。「‘Q+也+P(肯)’结构是一种不合常规、比较特殊的格式，它的出现是内因和外因相辅相成的结果。基本假设是「如果疑问代词的偏指性变弱，向任指性靠拢了，那么疑问代词跟谓语的选择关系(即疑问代词要求否定式谓语跟它搭配)也就会变得不那么严格。结果即使在‘Q+也’后接上肯定式谓语，也仍然具有一定的可接受性(acceptability)」。造成这种转变过程的内因是这种结构里疑问代词借助“也”的“类同义”临时取得由“任指”向“偏指”的语义功能的转变。外因则是这种结构「属于演绎论断型的时候，疑问代词的指代对象构成的不是一个由数量上有限的‘有定’成员组成的封闭性集合，而是一个由数量上无限的‘无定’成员组成的开放性集合」(日本語略訳：「‘Q+也+P(肯)’の構造は従来型ではなく、特殊な構文である」、その出現は内因と外因の相互補完の結果である。基本的な仮設は「疑問代名詞の偏指性が弱くなり、任指性に近づけば、疑問代名詞と述語の選択関係(つまり指示代名詞は否定式の述語との組み合わせを要求する)もそれほど厳密でなくなる。結果的に、‘Q+也’の後に肯定式述語が続いても、まだ一定の受容性(acceptability)がある。この転化プロセスの内因は、この構造の中の疑問代名詞が、「也」の類同義の働きによって一時的に「任指」から「偏指」への語意機能に移り変わったことである。外因はこの構造が「演繹論断型」に属した時、疑問代名詞の指し示す対象が、数が限られた「有定」メンバーで構成された閉鎖性集合ではなく、数量が無限の「無定」メンバーで構成された開放性集合に移り変わったことである)(杉村博文,1992,pp.170-171)。

上記の論述の最大の代償は、疑問代名詞が本来持つ「任指」機能を強引に「偏指」に解釈したことである。しかし、一旦例外が見つかると再び原点に戻り、その機能を「偏指」から「任指」に認めざるを得ないので、これは必ずしも合理的な説ではないと思われる。

杉村は上記の主張を維持しながら更なる議論を展開した。まず、「wh+也+vp(肯)」の語意基礎は“wh+也+vp”の本質が遍指である」と論じ、‘wh+也+VP’が否定文に傾いているのは論理的に必然的な展開ではなく、ただ自然言語の‘以偏概全’(事実の側面から全体を説明して誤った結論を引き出す)の修辞手段の影響がwhワイルドカード(wildcard)の性質や集合要素の非均質性の作用により、不自然な語意に解釈されただけだと分析している。

そして、杉村(2007)は次のように述べている。「其次要指出的是，‘wh+也+vp(肯)’常用来说明一般道理或进行演绎性论述，而这种情况下，wh对应对象之间的个别差异就不容易显现，或者说没有参与进来的余地。从而wh就会失去走向极端的语义机制，结果便放宽了vp肯定否定的选择机制。」(日本語略訳：次に指摘したいのは、‘wh+也+vp(肯)’はよく一般的な道理の説明や演繹法論述に用いられるが、このような状況の下では、whの対応対象の間の差異が現れにくい。或いは参与する余地がない。そのため、whが極端へ歩み寄る語義メカニズムを失い、その結果、

vpの肯定否定の選択制限を緩和した) (杉村博文 2007,pp.9-10)。この解釈にも少し無理があり、あまり合理的ではなく、我々は賛成できない。

我々の見解では、この問題は、「都」と「也」の基本的な意味(核心语义)及び肯定と否定との対立の極性によって説明ができる。疑問代名詞では、このような文(wh疑問文)における意味機能は依然として「任指」であり、特に説明する必要はない。「都」は総括を意味し、「也」は類同を表す(馬真1982,P.283)。これが両者の基本的な意味(核心意义)である。「都」が総括を表すため、「是一个加合算子, 它把一组复数性的事件加合起来」(加算演算子であり、それは一組の複数の事件を加算した)という指摘(袁毓林,2005,p.104)の通り、もしWhをワイルドカード(wildcard)と認めるなら、「都」はワイルドカードを1回加算しただけであるため、肯定文も否定文も総括して表せるので、これ以上の説明や解釈は必要ないであろう。しかし、「也」は類同を表すので、肯定文と否定文における使用は大きな非対称性を持っている。肯定と否定は極端な量の二つの反対の端である。肯定と否定は極性上に対立した二つのエンドポイントであり、「也」の使用は次の図のようになる。



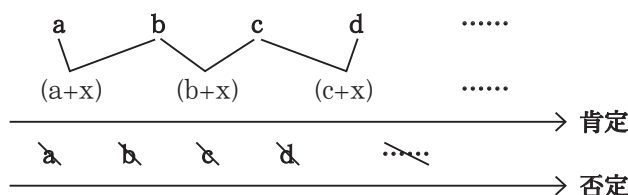
一つの集合{ a, b, c,……}の中で、whワイルドカードは集合の中の任意の要素または要素の部分集合に対応できる(xで表示する)。「也」は類同関係を表示するため、肯定文の中で同質要素の累加関係にあり、もし、bがaと類同関係であれば、aとbは累加関係であり、逐次、相加し、b+xになり、或いはc+x……になっていき、閉鎖的な集合に僅か二つ(多くて三つ)の要素がある場合のみ、加算の合計が総量になるが、このような状況は稀である。例えば：

(30) 你们谁也知道谁, 这有多好。「貴方たちはどっちもどっちを知っていて、これはどんなに良いことか」(あなたも私を知っていて、私もあなたを知っている。お互いに良く知っている)

(31) 这不怪你们, 发生这样意想不到的事情, 谁也会这样做的。「これは貴方達のせいではない、こんな思いがけないことが起こったら、誰もそうするよ」(皆さん、貴方もそうするし、私もそうする)(杉村1992例)

(32) 三个人谁也知道, 彼此该说分手了。「三人は誰も知っている、互いに別れを言うべきだ」

しかし多くの要素が存在する場合、whワイルドカードは前の要素のみと累加できるが、全ての要素を加算できない。従って、全体を総括できない。否定文に使われた場合は「也」の類同義の働きは累減作用になり、集合の中での役割は同類消去でa-x, b-x……(例えば: 張さんが来なかった。李さんも来なかった。だから、張さんと李さんは類同関係であり、全て消去されていき、集合の中に同類が残らなくなるまで)、全ての同類が消去される結果がゼロになり、ゼロは何もないことを意味し、徹底的な否定となる。



ここにも相反する極性、肯定と否定が存在する。ワイルドカードの加算と減算は極性線上に延

長できる。「都」の基本的な意味（核心語義）は総括であるため、肯定の極性上でも否定の極性上でも集合の中の全ての要素を任意的に総括できる。しかし、「也」の基本的な意味（核心語義）は類同であるため、肯定の極性上と否定の極性上においては異なる役割を果たす。「也」は否定の極性上においてはワイルドカードをゼロまで累減できて、全ての否定を表せるが、肯定文においては永遠にいずれかの元素と類同元素+1の関係であり、総括的な加算機能はなく、多項ワイルドカードの肯定的な極点に達成できない。つまり、肯定文の総括ができない。これが(29)“*谁也出来了”という文が成立しない理由である。

4. まとめ

以上、我々はいくつかの対立した極性を通して疑問と否定の関係を解析し、Wh疑問文での「都」と「也」の使用において、肯定と否定に非対称現象が現れることについても分析した。極性線に対立した二つの極性は、言語の使用上に異なるカテゴリーの相互関係をもたらすことができ、更に、同じ要素が異なる極性上に非対称性をもたらすこともできる。私達は極性の分析を通して、言語についていくつか新しい認識を得ることが出来た。

疑問文における疑問と否定の共通性は、「信-疑」の極性上に反映され、「信-疑」の極性は、「肯定-否定」の極性とは平行であり、「疑」の度合いが高ければ、否定度も高くなる。疑問文における疑問の否定は主観態度の否定であり、語用面での対応である。従って、疑問文、特にWh疑問文には、反語文によって派生した否定は、字面上の意味の反対のことを意味し、文法面での肯定と否定とは対立している。すなわち、文面上の肯定は否定になり、否定は肯定になる。Wh疑問詞の否定的な機能はまだ完全に文法化されていない。しかし、一部の単語は否定的な言葉に非常に近い。例えば「什么呀」(何をおっしゃる)、「哪里哪里」(とんでもない)等がその例である。

Wh疑問文の中での「也/都」の使用では、否定と肯定の表現において非対称の現象が生じている。これらの現象をどう解説するかは、色々な学者が様々な意見を持っているが、我々は二つの副詞の基本的な意味（核心語義）から肯定と否定の対立した極性に着目し、分析した結果、以下のことが明らかになった。「也」は肯定の極性では“増元”（類同要素の累加）作用があるが、総括的な機能を持たないので、遍指（全て指す）を表せない（クローズド・クラスclosed classは特例として認める）。しかし、否定の極性では“減元”（類同要素の累減）作用であり、一つずつ減っていくと最終的にはゼロになり、ゼロは何もないことを意味するので、遍指を表すことができる。

謝辞

*本稿は、2017年10月21～22日韓国延世大学で開催された第8回アジア太平洋地域国際中国語教育学会で、「疑問句中疑問与否定的相通性以及肯定和否定的对立」と題して行った口頭発表を日本語に訳し、修正、加筆したものです。日本語版を執筆にあたり大阪電気通信大学英語教育センターの上垣公明教授にご教授を頂きまして、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 太田朗.『否定の意味』.大修館(1980初版発行)p.272
- 2) 太田朗.『否定の意味』.大修館(1980初版発行)p.273
- 3) 「周遍性」は言及した範囲内において例外がないことを表す。

参考文献

- 戴耀晶 2001: 汉语疑问句的预设及其语义分析,《广播电视大学学报》(哲学社会科学版)第2期 pp.87-90, p.97
- 陆俭明 1986: 周遍性主语句及其他,《中国语文》第3期 pp.161-167
- 吕叔湘 1985: 疑问·否定·肯定,《中国语文》第4期,又见《吕叔湘全集》第三卷,辽宁教育出版社 2002年12月 pp.510-530
- 马建忠 1983:《马氏文通》,商务印书馆新1版
- 马真 1982: 说“也”,《中国语文》第4期 pp.283-388
- 金昌吉 2017: 疑问代词的语义及句法功能的分化与语法化一以“哪里”“哪儿”为例,《国际汉语学报》第7卷第2辑 pp.72-79
- 杉村博文 1992: 现代汉语“疑问代词+也/都……”结构的语义分析,《世界汉语教学》第3期 pp.166-172
- 杉村博文 2007: 现代汉语疑问代词周遍性用法的语义解释--任指、遍指和偏指,《日本现代汉语语法研究论文选》,北京语言文化大学出版社 pp.284-301
- 沈家煊 1999:《不对称和标记论》,江西教育出版社
- 王力 1980:《汉语史稿1958》,中华书局
- 杨晓涛 2011:《疑问和否定的相通性及构式整合研究》,中国社会科学出版社
- 袁毓林 2004: “都、也”在“WH+都/也+VP”中的语义贡献,《语言科学》第3卷第5期 pp.3-14
- 袁毓林 2005: “都”的语义功能和关联方向新解,《中国语文》第2期 pp.99-109
- 张斌 1998:《汉语语法学》,上海教育出版社
- 朱德熙 1982:《语法讲义》,商务印书馆,1984年8月第2次印刷
- 太田朗 1980:「否定の意味」、大修館初版発行
- 太田辰夫 1958:「中国語歴史文法」、江南書院第1冊
- 宮崎和人 2005:「現代日本語の疑問表現」、有限公司ひつじ書房初版第1刷
- 金水敏、工藤真由美、沼田善子 2000:「時・否定と取り立て」、岩波書店第1刷発行